

のび太くんが嬉しかったのは、
便利な道具より、
そばにいてくれたことかもしれない。

ドラえもんを嫌いな人に会ったことがない。
子どもはもちろん、大人も、お年寄りも、
空想を信じない人ですら、

自分だけのドラえもんどの思い出を持っている。
それはきつど、便利で不思議な道具や
愛らしい見た目によるものだけじゃない。

ドラえもんが私たちの心をつかんで離さないのは、
未来のテクノロジーよりもむしろ、

人間以上に人間らしいロボットだからではないだろうか。
のび太くんの弱音や不安を受け止め、

どうにかして彼に夢を見せ続けようとした
姿勢によるものなのだと思う。

それはまさに、バカラが目指す姿そのものだ。
今から251年前に生まれたバカラの製品は、

目新しい機能を持つわけでもない。
もちろん、なくても普通に暮らしていける。

けれどそこには人の想いや夢を映すことができる。
ああ、あのときこんな気持ちだった。

あんな目標を抱いたんだ。
あなたが道に迷ったとき、そうやって思い出せるように、
一点の濁りもなく、そばで輝き続けることができる。

2112年生まれのドラえもん。
1764年生まれのバカラ。

そばで見守り、夢を届けるという使命を持つふたりが、
時を超えて今、ひとつに。

